

# 古写真から見た大正期までの日本街並み史概観

—日本の街並みの形成と消滅—

## Overview of the Townscape History in Japan up to Taisho-era Based on the Old Photographs

—Formation and Diminution of Japanese Townscape—

相羽 康郎 | Yasuo AIBA

Townscape in Japan has diminished after the high economic growth in 1960's. Before then traditional style of wooden low-rise houses consisted townscapes in all Japanese city. The reasons of the disorder of townscape are explained in many books or reports as quite different level of the phenomena as such a cultural one. This article tries to analyze the reasons in realistic way by using old photographs from just before the Meiji era to Taisho era (1868-1912).

Townscape is a result of many complex factors. But first of all it is a very important fact that traditional wooden building has a system to create prototype of townscape in itself.

There were 3 types of traditional townscape based on samurai residences, townhouses, farmhouses. People has adapted traditional style wooden houses, even in case to broaden front road and traditional wooden houses or warehouses covered of mud to prevent fire were build.

At a very small part of the roadside middle rise townscape has been made after the Tokyo city renewal project in Meiji-era.

Buildings using new material of concrete have been made along the fire-protecting road in Hakodate city after the big fire in 1921. A local city has performed a progressive role but that could not affect the coming rebuilding plan after the Kanto big earthquake. A new prototype of townscape has not realized in Japan then.

Keywords:

old photo, traditional wooden townscape, new material of concrete, prototype

### 1. 序論

戦後高度経済成長期以前に、日本の多くの都市には街並みがまだ存続していた。これらの街並みは明治時代から継承されてきたものであって、現代建築によって生成された街並みの存在はつい最近までなかなか確認することはできなかった。

高度経済成長期以前でも、すでに急激な経済成長を経験した都市部の中心市街地、繁華街などの目抜き通りには、近代的なビルやビルを模した木造建物が立ち並んで、しかし街並み形成には至っていなかったけれども、1960年代以降、それまで街並みの存在していた地方都市でも、明治時代以降の街並みの崩壊および消失が急速に広まった。

その理由を要約すれば、完成の域に達していた伝統工法の建物が持つ街並み形成のプロトタイプに代替して、西欧化する生活および住まい・店舗に応じた街並み形成を可能とするプロトタイプおよび街並み形成方法をつくらなかったからである。

東京は関東大震災後、震災復興計画の実施に伴い、明治期からの伝統的な街並みとは断絶した、防火仕様の四角い形状の建物に置き換わっていき、その形状の建物がその後全国の市街地に蔓延していく。この形状の建物は、新たに街並み形成のプロトタイプとならないままに叢生し、伝統工法の建物によって形成・継承してきた街並みを、崩壊させていく。

都市部の中心市街地、繁華街など1930年代には屋外広告物の看板や幟旗が溢れ、明治期とは雰囲気を変えていた。しかし大都市の中心部を除けば、1960年代頃まで建造物自体においては、それでも街並みが存在していた。

## (1) 街並みの定義

現在「街並み」として認知されているのは、明治期の面影を残す、揃いのある建物が連続する沿道景観といつてよい。この「街並み」は定義をしなくても一般的共通に認識されていると想定できるけれども、ある程度汎用がきき、今後の街並み形成にも役立つように、ここでは街並みを以下のように定義する。

街並みを成立させるのは、揃いであり、その要素として、高さ・壁位置・屋根・開口部・基調色・材料・様式(諸要素統合ルール)を挙げる。

さらに優れた街並みは、揃いと変化の両方が必要で、要素が揃うとともに、少しずつズレや変化がつけられており、さらに間口・部分意匠および強調色などの要素が変化している。

## (2) 街並みの不在証明

1960年代以降顕著となった街並みの不在に対して、いくつかの著名な論陣が張られた。ことに芦原義信の著わした「街並みの美学」<sup>1)</sup>が有名である。

この著作を要約すると、ヨーロッパの美しい街並みに対して日本の街並みが乱雑を極めていることの要因として、和辻哲郎の「風土」の一節を引用したうえで独自に、土足に着目する。ヨーロッパでは寝室で靴を脱ぐまで住宅内も土足で生活していて、居間と街路は地続きであることから、自分の住宅の居間と同様にまちの街路まで意識が行き届いて、公共意識が高く美しい公共空間が出来上がっている。対して日本では、玄関で靴を脱いで上がる住居空間が内部で、靴を履いて出る外部の街路空間と、親密な住居内とは切断され、住居内を大事にする一方、住居から見えない公共空間をないがしろにして、公共空間が貧弱になっている。

この著作は、和辻哲郎の「風土」による決定論をいわば街並みの文化事象にまで拡大したものといえる。街並みを新たに形成しようとするとき、そこがこの論の最も危険な点である。すなわち土足による決定論を明快に論じ切れば切るほど、街並み形成を新たに実現するのに、違和感をもたらすからである。果たして日本の街並みが混乱している原因が沓脱ぎにあるとしたら、住まいを土足空間としない限り、街並みの形成は不可能なのであろうか。また土足で入

る習慣を定着させれば、街並みは秩序を持ったものになるのであろうか。そんなことがあり得ないのは自明である。

ところが和辻哲郎の「風土」の鮮やかな説明に影響されてか、こうした決定論は芦原だけに見られるのではなく主な論が他にもいくつか挙げられる。例えば、西洋では市民の公共意識が高いために都市空間が美しく形成され、街並みを美しく保っていると論じる一方で、日本にはその市民意識が育っていないため、公共空間を乱雑なままにしているとするのである。曰く、青銅器時代の成熟が都市文明を成熟させたのであり、その歴史時代の乏しかった日本には真の都市文明は育たなかった<sup>2)</sup>。城壁による堅固な都市の範囲決定による都市文明および都市市民階層の発達と、日本の都市の城壁不在による都市文明ないしは都市市民権の不在<sup>3)</sup>、父性原理の卓越するヨーロッパ文明における城壁に囲まれた都市に対する、母性原理による都市と自然の融合する文明と地域社会の脆弱さ<sup>4)</sup>、などが挙げられる。

いずれも街並み不在の要因を、都市文明、都市市民における公共意識の不在に結び付け、その要因によって決定されているという形式をとっている。そしてヨーロッパでは都市市民意識の存在が都市を、公共空間として尊重し美しく形成してきたのに対して、日本の都市空間が乱雑であるのは、その欠如のためであるとしている。

## (3) 街並みの存在証明

それでは日本に美しい街並みが存在しないのか。そういうわけではない。平成25年8月7日現在日本全国に84市町村104地区存在する重要伝統的建造物群保存地区に行けば、揃いのある美しい街並みが存在していたことが判明する。保存された地区の街並みは何か特殊な条件で形成され継承されたとしてもいうのであろうか。否、重要伝統的建造物群保存地区がその街並みを保全継承できたのは確かに特別な条件に恵まれたからかもしれないが、少なくとも街並み形成に関しては一般的であったことが、明治期のパノラマ写真と名所などの街並み古写真などを分析すれば明らかである。町中至る所に、伝統的建造物が連なる街並み、農村エリアでは宿場町が存在していた。また明治期までは、東京でさえ揃いのある伝統的な街並みを継承していたし、地方都市では高度経済成長期前までは、街並みが十分実在していた。その街並みの姿はしかし崩壊してしまい、今や一部の保存地区を除き、かつての姿は見当たらない。

い。僅かにその面影が偲ばれるいくつかの地区を残して、儼くもかつての街並みは崩壊し消失し、新たに近代建築や現代建築によって街並みが形成される事例は極めて限定であった。ここ20年くらいの前1990年代から建築家の関わる地区設計の方法論が進展したことで、やっと現代的な街並み形成が始まった。

すなわち、街並みに関わって決定論を安易に適用することはできない。諸説が追い求める決定的な要因に基づいて説明しようとも、街並み形成という極めて複雑な事象を一刀両断し、最下層に横たわる日本の特殊性のせいにするのは、陥りやすい論説の罠である。事象の説明の層(レイア)を因果関係の成り立つ同じレベルにしてから論じなければならぬし、今後変更可能な要因でなければ、不可能論に陥ってしまう。

これまでの街並み不在論はあまりに、街並み形成の現実および制度論等のレイアからかけ離れ、断絶しすぎている。

本論では、街並みの形成と崩壊の具体的な要因を推察し説明するとともに、新たな街並み形成に至らなかった要因を明らかにする。

## 2. 街並み形成および継承の要因

### (1) 街並み形成の要因

街並みの定義について、街並み形成要素である、高さ・壁位置・屋根・開口部・基調色・材料・様式(諸要素統合ルール)等の揃いを挙げたが、こうした揃いが沿道の建造物に現出するのはどうしてなのか。

最も分かりやすい仮説は、通りや地区において多くの建物が参照するプロトタイプが存在し、これに基づいて建造物が次々に建設されていったというものである。この仮説の上位のレイアで、仮にプロトタイプが存在しなくても、街並み全体を制御できる体制が整っていれば、その都度調整することで街並み形成が可能になると考えられる。

江戸および明治期までの街並み生成においては、大工等の用いる伝統工法の体系的な技術情報の中に、全体を統御する仕組みが内在していたといえるのではないかとすなわちプロトタイプが果たす機能は、総合的、体系的な伝

統工法ないしは造作技術の集合全体に存在していたといえ、伝統工法の建造物は、街並み形成できる要素も持ち合わせていたといえる。伝統工法を使って建設していれば、間違いなく街並みが形成できる方法体系である。伝統工法に明治期以降西洋建築の体系を一部取り入れることもできた。両者の体系を巧みに組み直し、和洋折衷の住宅や擬洋風と呼称される建造物がそれらの成果であるが、記念建造物や伝統的な街並みの中にひとつだけ目立つような按配で、プロトタイプ化されて街並みを形成することにはならなかった。

また棟梁が街並み全体を統御して連続する通り沿道を全体として街並み形成する機会があった可能性がある。例えば大火後の建造物再建は時期を同じくして、同じ棟梁に差配された大工達が施工した可能性が考えられる。また数人の棟梁が互いの建物建設にあたって、同時期に影響を与え合ったり調整をした可能性もある。法制化された体制がなかった場合でも、大火後に蔵造りの防火建築が多く建造されたのは事実であり、大火にも燃え残った蔵造りの建物を見て、いち早く財力のある施主が蔵造りの建物を建設すると、後続の施主もこれに倣った可能性は高い。施主レベルでの申し合わせなどもあり得たであろうし、蔵造りの建物を棟梁に任せて沿道の街並みを形成することも行いやすかったと考えられる。

### (2) 明治期までの街並み形成

明治期までの建造物は、木造で伝統的な工法に従い、勾配屋根を上へ頂く殆どが2階までの和風の建造物などというプロトタイプに倣って建設されていた。

すなわち伝統的な木造工法の範囲内で造られる建物は、その造り方自体に街並み形成の要素を備える、いわば大谷幸夫<sup>5</sup>の思想のひとつである「個即全」<sup>6</sup>を実現していたといえる。物的には木質素材の限定とその伝統的工法が存在することが大きく効いており、次につくる側においてその工法の大工集団への普及があり、これに上からの規制となるお触れなど、別のレイア(層)が関わってくる。

つくる側において、施主となる人々の意向は、江戸時代当時それほど強く街並みに影響を与えたとは思えないが、明治以降は施主の意向が建物の作り方に大きく影響し、街並みにも影響をしてきた。例えば明治期の公共建築は政府の西洋化の方針にしたがって洋風になったし、西洋

化の影響下にある医院や時計店でも、西洋風の建物が建設されたのは、施主の意向によると考えられる。

### (3) 明治期街並みが維持できた理由

明治期までは伝統的な木造の建物が連続して街並みを継承していた事実は、古写真から推察できる。これは建て替えや、大火後の新たな建設時に、西洋風の建物を選ばず、伝統的な工法を選択したことの結果である。西洋化を推進する政府や市町村の行政に対して、都市住民が伝統工法を選択し続けた理由は何であろうか。

江戸時代以降の街並みが建て替えるに際してほとんど西洋化しなかった理由の第一は、最も抵抗の少ない、合理的な選択であったためと考えられる。つまり上からの法制度による規制・誘導が未熟な状況にあって、世間の慣習的な行動が、建設に際して影響が大きかったことになる。慣習として当時最も見慣れた、伝統工法の建物が見習うべきモデルとして大きな存在であったと考えるのが自然である。

造り手の大工にしても、伝統工法を生業とする者が大多数を占め、材料、調達市場など、すべてにおいて、抵抗のない方法が伝統工法であった。

さらに経済合理的にも煉瓦や鉄骨などに比べて、漆喰や土や木の壁で覆われる木造建築が優れていたと想定できる。すなわち西洋風建物の建設は、経済的にも負担が大きかったと想定される。こうして、西洋化を推進したいとする上部のレイアに属する法制度上の意志はあったにしても、社会情勢を反映した生活慣習上の意志決定がこれらの伝統的街並み維持に効いていたといえる。

街並みを形成する住宅・店舗の建設を担う生産側も、伝統工法にもとづく建設組織が圧倒的多数であって、西洋化した記念建造物を建設できる組織は、一部の建設会社に限定されていたはずである。一般的な住宅・店舗の建設にあたって、施主も大工も伝統工法による建設が前提であった。西洋医学の医院や時計店など西洋化をことさらに強調する必要のあった施主以外は、結果として伝統工法の選択を行うのが一般的であった。

### (4) 大火と街並み

明治初期に銀座の煉瓦街建設事業が、大火後の機会をとらえて、明治政府の肝いりで実行された。不燃化と西

洋化を実現する構想であり、お雇い技術者のウォートルス(Waters)は、煉瓦製作の指揮も執りながら、ジョージアンスタイル(飾り立てることのない質実なタウンハウスの様式)の2階建て連続長屋を銀座通り沿道および周辺一帯に建設することができた。銀座通りは歩道のついた広復員通りになり、2階のテラスと1階のアーケードが連続する煉瓦造のタウンハウスが並ぶ西洋風の街並みとなった。これらの建造物は払い下げられたが、当初は払下げが順調に進まず、西洋風の建造物に住まって商売をすることに大きな抵抗があった。

その後も大火の頻発する東京中心部を不燃化することは、東京府の重大な目標となり、都市の近代化とともに中心部を市区改正して、広復員道路網化し馬車・市電の敷設へと公共交通を整備することが目指された。明治政府の西欧化政策とともに中央官庁街には欧風の公共施設が建設されていくなか、銀座通りに続く日本橋以北の室町通りも拡幅されたが、市区改正以前に火防線として指定を受け、防火建築に建て替えなければならなかった沿道なので、後述するように拡幅は西側の一方のみとし東側には土蔵造りの建物がそのまま並んだ街並みとなった。防火建築とされた石造、煉瓦造、土蔵造のなかで沿道の施主は当時、伝統的な土蔵造りを揃って選択したためである。ここでも伝統的な構造に馴染みのある施主の性向が看取される。また、このように揃えられるのは、施主側ないしは建設組織側において、意志の調整を事前に行っていたためと考えられる。

なお日本橋室町通りの蔵造りの街並みは、その後大火のあった後の街並み形成に大きな影響を持った。その典型が埼玉県川越市であり、富山県高岡市や長野県松本市でも、現在に残る蔵造りの街並みが形成され、継承されてきた。

銀座煉瓦街の後、煉瓦造りの街並みが本格的に建設されたのは、三菱地所という国家の目標を遂行するのに適した組織が丸の内に明治末までに建設した一丁倫敦と呼ばれた事務所街であった。

### 3. 明治期・大正期の古写真に見る街並み

#### (1) 街並み明治初期3類型:

武家長屋、町家、農家、および外国人居留地の洋館

江戸末期から明治初期にかけて、外国人の撮影した古写真が残っている。街並みも撮影されており、これらが美しい街並みだから撮影された可能性もあるけれども、他の街並みがこれと異質な存在であった可能性は低い。なぜならば、パノラマ写真が撮影されており、そのなかに撮影された街並みもあることと、少なくともパノラマ写真で見る姿として、撮影箇所が特別な姿をしているわけではないためである。伝統工法による、揃いのある屋根と勾配からなるパノラマ写真からは、都市全体がかなり統一感のあるまとまりをもった街並みから構成されていたことがわかる。そのうえで、明治初期頃までに撮影された古写真から、街並みを大きく3つのタイプに分けることができる。武家屋敷の街並み、町家の街並み、農家が連続する街並み(宿場町)である。さらに、函館、横浜、長崎等の外国人居留地には、洋風建築の街並みがある。

これらの特徴は古写真を比較すれば一目瞭然に区別することができるが、敢えて整理すると[図表1]のようになる。ただし、外国人居留地の街並みは3者とは異質である。また各タイプの古写真を[写真1~4]に示す。

#### (2) 各タイプの特徴

##### 1) 武家屋敷の街並み

江戸末期、明治初期には武家屋敷は古写真に撮影されたが、その後武家屋敷はいち早くほとんどが消失していく。

一般的には、公共施設用地(公園や官庁建築等)、民間払下げによるお屋敷街などの住宅地、空地(茶や桑などの畑も含む)等に変化した。街並みについては一部囲いの長屋を町家に改造した事例に見られる継承の他、景観としては長屋が取り払われるなど大きな変化をした一方、内部が洋風邸宅や公共施設に変化しても街区周りが長屋から塀などに変化しつつ囲いのあるパターンは継承した。武家屋敷の長屋が町家にリフォームされた事例を東京港区芝愛宕山からのパノラマ写真に見ることができる[写真5、6]。

##### 2) 町家の街並み

町家は東アジアの四合院形式と並んで、都市建築の1タイプとして日本が世界に誇る典型的な建築形式といえる。「世界の住まい」<sup>7</sup>においても、世界中に共通する中庭形式の都市型集合住宅のひとつとして紹介されている。その特徴は、簡略化してまとめれば、間口が狭く奥行の大きな敷地に、通りから土足で入れる通り庭を奥に向けて通し、坪庭や中庭を挟んで座敷が並ぶ。外観の特徴は、おもに2階建てで、街路に面して1階は開放的な造り、2階は窓が格子で覆われる。通りに平入り<sup>8</sup>で並ぶか、この並びに妻入り<sup>9</sup>の町家が入り混じる。住居併用の商業機能を持った建築形式であり、現在でも多くの町中で町家自体は見る事ができる。しかし街並みとして町家の連続する景観は、戦後

[図表1] 街並みタイプごとの特徴

	武家屋敷の街並み	町家の街並み	農家宿場町の街並み	外国人居留地
街並全体	囲いとして連続する長屋・塀	2階建てが主で道際に開放的	1階建て・萱葺き大屋根が主	2階建てが主。塀あり
屋根	街区で統一の長大な長屋屋根。角で入母屋	切妻屋根・平入りが主。妻入りが混じる	勾配の急な寄棟の茅葺き屋根が揃う	勾配の緩い寄棟
配置	道際に統一	隣り合って連続	独立および近接	独立
道側壁面	閉鎖的	1階開放的。2階は小さめの窓	開放的	塀
その他	上が漆喰で下に板張りの統一的外観	窓に格子が付く。素材、意匠に多様性		



も中心市街地に町家の街並みが保全継承されていた京都でも、第1次マンションブーム(1960年代)などを経て、かなり見ることが困難になっている。

通り沿いに蔵店の町家が並ぶ街並みも明治期盛んに建



【写真1】 武家地の街並み a



【写真2】 町家の街並み b



【写真3】 農家宿 a



【写真4】 外国人居留地 c

a、b、c: 巻末文献参照(以下同様)

設された。木造とはいえ防火づくりの土壁で被覆された街並みは独特である。しかし、町家タイプの変異型として蔵造りのタイプを町家タイプとして分類することは可能と考える。

### 3) 農家の宿場町の街並み

農家は互いに離れて建設されることも多く、街並みを構成するのは、おもに宿場町となっている農家などである。農家タイプであるとともに、宿の機能を併せ持ち、おもに萱葺農家が少し離れて、沿道に並ぶ基本的に平屋で大きな寄棟の屋根の連なる街並みである。

### 4) 外国人居留地の洋館

木造の洋風建物はそれぞれ独立しており、敷地周りを塀で囲う形式は、武家屋敷と似ている。屋根は寄棟であり、テラスや2階のバルコニーなどに特徴がある。街並み形成は外国人居留地のみで見られるものの、洋館を日本人大工が現場で学べる良い機会を提供した。一方連続するタウンハウスのように、都市住宅として新たな近代的街並みに資する形式について日本人大工が学べたとしても、それを日本人の町で活用する機会はなかった。

### (3) パノラマ写真からみた街並みのタイプと推移

武家屋敷が大半を占めた江戸東京の街並みをパノラマ写真で検討する。

#### 1) 愛宕山からのパノラマ

フェリーチェ・ベアト撮影の愛宕山パノラマ写真[写真5]とほぼ同じ視点から、多時期のパノラマ写真が存在し、これらを比較すると、武家屋敷の変貌および街並みの変貌を伺うことができる。

愛宕山は神社の土地柄であり、その意味で他の場所より変貌が緩やかであった可能性はあるけれども、1900年代のパノラマ写真まで、ほとんど全体の印象は変わっていない。

江戸末期のパノラマ写真では、2階建ての白壁の連続する武家屋敷地外周の長屋が街並みを構成し、かなり整然とした印象である。

この時期から約30年後の1890年代パノラマ写真[写真6]を比較すると、興味深いことに外周部の長屋が閉鎖的な白壁から開放的な町屋へと変更されている。屋根・外形



【写真5】愛宕山からの眺望 1865-66 c



【写真6】同上 1890年代 c

など建物本体は変わらず、壁面部分のみが改修され、店舗機能を持った町家へと、その用途も転用されている。また払い下げが個別に行われたのか、長屋の一部分が独立して建て替えられている個所もある。そのうちの1か所では三角屋根のかなり大きな建物が建設されている[写真6右側外]。

一方、武家屋敷内部では、建物の形がかなり変化しており、新たな使用者がその目的に応じて建て替えたものと考

えられる。

古写真のうち最も新しい1900年代のパノラマ写真は、基本的に1890年代のパノラマ写真からの変化は小さい。

一般に昭和初期以降繁華街では、屋外広告物が溢れかえり、街並みの印象が大きく異なってくるものであるが、明治期までは江戸時代以来の雰囲気が継続している街並みが多い。この場所は愛宕山神社の門前にあたっており、土地所有が安定していること、神社所有の借地権者は勝手に改築しにくいことなど、いくつかの仮説を想定することは可能であるが、銀座、日本橋などの市区改正をした場所とは異なり、東京市内でも落ち着いた雰囲気を明治末期まで継続していることが確認できる。

## 2) 銀座上空からのパノラマ

明治37年(1904)に撮影された<sup>10</sup>パノラマ写真からは、明治初期の大火後に計画実施された銀座煉瓦街のその後の外観を見出すことができる。銀座通り沿いに並ぶ、統一的な煉瓦壁と思われる建物が連続屋根のもとに連なっている。明治7年の銀座通り完成直後にはジョージアンスタイルの街並みが写真に残っているが、数年後にはすでに1階アーケード部分への増築、2階バルコニーへの増築や、和風看板の設置などが見られ、その後も表層は改変されてほとんど原形はとどめていない区間もあるけれども、パノラマ写真では同じ屋根の連続と、壁面の意匠の継承部分が確認され、銀座通り西側建物の壁面で2階バルコニーと壁面が原形を留めていると確認できる区間は1/3程度あり、大きな骨格的な外観および街並みとしての外形は継承されている。これらはパノラマ写真で、上空から屋根が主体の伝統的な町家等とは区別できる壁面主体のパターン



【写真7】銀座上空からのパノラマ d

を見せている。パノラマの範囲は銀座中心であり、京橋以北の様子は不明だが、すでに蔵店の防火建築が建ち並んでいた時期である。

さらに、周辺の街区にも明らかに町家とは異なる壁の立った外観の建物が広く分布している。「明治の東京計画」<sup>11</sup> 巻末図版4の煉瓦造建物の分布図面によれば、銀座通りを中心に東西方向は数寄屋橋から三原橋、南北方向は新橋から京橋までかなり広い範囲にかけて、街区外周に煉瓦造のおもに3連棟以上の西洋長屋と個別家屋が建設されており、その範囲をパノラマ写真で検証すると、わかりづらい箇所も多いけれどもおおそ重なるものと想定できる。

銀座4丁目の服部時計店のドーム状の塔屋を持った独特の外観も見ることができる。

パノラマ写真には、三原橋を越えた西側にまで、同じ壁面からなる建造物が目立つ。数はわずかであるが銀座の連棟式ではなく個別の2～3階建て店舗併用住宅があり、やや規模の大きな商社ビルと想定される建物では煉瓦造と想定できる2～3階建ての建造物が目立つ。銀座煉瓦街が出現し、その建設に従事した大工・工務店が身近に存在したことがこのように周辺へ煉瓦造の普及を及ぼしたと考えられる。三原橋の西側ではその他にも、大規模な公共建造物が煉瓦造や石造などの建造物として2階以上の大きな壁面を見せている。

一方、[写真7]には入っていないが、新橋以南をパノラマで見ると屋根主体の伝統的な街並みが一体に広がっており、煉瓦家屋は見当たらない。不燃化を煉瓦街で実現する当初の政府等の構想は、一般民間の動きとなることはなかった。煉瓦製造・建築構造・大工組織・生活様式等の面で困難があって、実現されなかったと想定できる。明治期に

防火とすることが令規で定められた地区、通りではほとんどの場所で土蔵造りが選択された。

なお現丸の内のあたりは、広大な空き地が広がっており、三菱の一丁倫敦は4号館が建設され、5号館は建設中<sup>12</sup>のようであり、街並みとして出現するのはもう少し後の時期になる。

以上、銀座地区にはウォートルスの設計からなるジョージアンスタイルの西洋長屋という、その後の日本では広まらなかった特殊な街並みが、銀座通りを中心に東西方向は数寄屋橋から三原橋、南北方向は新橋から京橋までかなり広い範囲に広がっていたことがわかる。

### 3) 文京区湯島ニコライ堂からのパノラマ

明治22年(1889)に撮影された<sup>13</sup>ニコライ堂を中心とした全方位のパノラマ写真があり、すべての方角にかなり遠方まで確認することができる。

周辺は武家屋敷地であったが、その名残を見ることが可能で、街区の周りが塀・長屋で囲まれて、整然とした外観が確認できる。ニコライ堂直下西側で西へ伸びる狭い街路、これと並行する南側の街路[写真9の最下方]などに、1階一部2階の長屋と塀が連続して並ぶ街並みを確認できる。武家屋敷の長屋がそのまま継承されているのかは明らかでないけれども、沿道際に白壁の長屋・町家が整然と連なるパターンは踏襲されている。

またニコライ堂を中心とする円周状に強く連続する屋根が半周近く並んでいるのも、武家屋敷の外周にあたる。強く連続する屋根[写真8、9上部3～4割あたりの水平方向]は武家長屋と想定され、愛宕山のように町家に改造されていた可能性が高い。江戸切絵図等によれば、この半周の神田に近づく4街区[写真8]はこの道路を挟んで日本橋側



[写真8] ニコライ堂からの眺望 東方向 e



[写真9] 同左 南方向 e



が町地、御茶ノ水側が武家地であったがパノラマ写真8では両側とも町家である。その箇所より西側は両側とも武家地であったが、神田に近い方は建て替えられた町家が多くなっており、屋根高さにずれが見られる町家の連続する街並みとなっている。

いくつかの街区内部には洋館および大きな家屋が見られ、周囲を堀・長屋で囲まれたお屋敷街といえる状況である。また街区内部に家屋が建て込んでいところもあって、払下げないしは貸家経営の家作と考えられる。

一方古地図と照らし合わせて、江戸時代から町家として存在していた主な沿道には、統一的な切妻屋根を平入に連ねる町家の街並みが確認できる。

特筆すべきは、他の町家よりも勾配の急な揃いの屋根が連続している様を確認できる室町通りから北上して本郷通りにつながる神田地区の沿道[写真8上部4割左1/5から右上方への直線]である。ここは明治初期に複数の大火に見舞われた地区で、1881年に防火線に指定されて、一斉に同じような防火造の蔵造りが並んだ沿道であり、京橋以北の日本橋通りから同様の街並みが連続する路線である。屋根の厚さが大きく、重厚な塗り込めの街並みと想定される。川越の蔵造りが見做ったといわれる江戸の蔵造りはこの圧倒的な街並みであった。

また秋葉原の周辺は間近な写りで、町家の1軒1軒がはっきり区別でき、角の町家では直角よりも緩い角度の通りに沿って屋根が造作されている。沿道は概ね屋根が揃った町家の街並みであるが、平入に妻入りが少し混じるなど、やや多様性が大きい街並みである。

#### (4) 大火後の土蔵造りの街並み出現

大火を防護する不燃化事業として政府が実施した銀座通りと周辺一帯の煉瓦造による街並み形成事例は、その後の大火後に不燃化街並み形成のモデルとして活用されることはなかった。明治期大火後等に法的に定められた不燃化方式は、一般に石造、煉瓦造、土蔵造のいずれかでよく、圧倒的に土蔵造が選択されたからである。

1975年文化財保護法改正により伝統的建造物群保存地区制度ができ、日本の伝統的な街並みが継承される制度的な基礎ができたが、現在重要伝統的建造物群保存地区に指定されている街並みには、18世紀中頃以降の大火後に建造されて現在まで保存継承されている街並みが

かなりにのぼる。江戸期は町家の窓から窓への延焼防止のために袖壁を1階屋根上にまで突き上げた卯建ちを上げたり、漆喰を軒裏にまで厚く塗り込め延焼の恐れのある箇所の表層を不燃材料で仕上げたりと、町家の表層に工夫をした街並みが出現した。明治期以降、防火構造として土蔵造りの蔵店が一斉に建ち並ぶ街並みが出現するようになった。

ここで重要な点は、明治期以降の大火後に市区改正で道路拡幅や家屋に防火措置を徹底した街並みもあれば、伝統的な木造建築を再び建設した街並みもあったことである。明治初期横浜市で防火令を発令したが防火造の規制が徹底できなかった事情がある。経済的にまだ余裕のない明治初期、一般の木造よりも経済的負担の大きな防火造を強制することは困難であったと想定できる。しかし、度重なる東京中心部での大火のため1881年東京府により防火造の規制が実行されて、沿道に土蔵造りの蔵店が建ち並ぶ揃いの土蔵街並みが出現した。これは令に基づく規制によってできた街並みであるとともに、他の防火造でなくほとんど土蔵造りが揃ったのは、沿道の施主および大工達の選択の結果である。これ以降、川越、高岡、松本などで、それぞれに倣って土蔵造りの蔵店が並ぶ街並みが出現した。江戸時代から土蔵が大火後に個別に作られることはあったが、街並みとして土蔵の蔵店が並ぶことはなかった。東京府の防火都市計画が知れ渡る以前は、個別に土蔵がつくられても街並みとしては、軒裏など延焼しやすい箇所の表層を漆喰で塗り込めて伝統工法による木造町家で復旧するのが一般的であった。

東京府の防火都市計画が知れ渡った明治期以降の大火後であっても、宿場町などで伝統工法の木造町家による街並み形成は行われていた<sup>14</sup>。

多くの重要伝統的建造物群保存地区および今日まで街並みが保存されてきた地区が、江戸後期から明治期にかけて大火にあったことは、伝統的な街並みが継承された背景として確認しておく必要がある。第一に大火という災害後に、揃いの街並みが一斉に建設されやすい条件があった。そして第二に、形成された街並みが存在したことによってその後も一体として継承されやすかった。すなわち、法的に街並みの保存制度が未整備であっても、街並みを受け継ぐ住民たちが慣習的に集団として揃いを維持し、近代的でないしは個人主義の自由でないしは勝手な建て替えを行わなかったのは、そうした慣習が機能しやすかったので

はないか。

一方重要伝統的建造物群保存地区で蔵造りの街並みでも倉敷市のように大火とは無縁の地区もあるし、江戸時代以前から木造のまま大火を免れてきた地区もある。保存地区指定まで伝統的な工法による増改築、建て替えが慣習的に維持されてきた背景には、むしろ大火後に形成された伝建地区でも共通するが、経済的に土地資本を最大限利用する不動産業者への売却や、近代的営業本社ビルを必要としないで済んだ地区であったことがある。しかしその前提に、揃いの美しい街並みの価値を沿道の人々が暗黙のうちに認め合っていなければ、簡単に近代ビルに個々で改造してしまったと考えられる。日本のほとんどの都市の街並みは、法的には不燃化を要請され、慣習的な縛りも効かなくなって、高度経済成長のもとで街並みを崩壊させ、新たな街並み形成を成し遂げられなかったまま推移したのであった。

#### (5) 市区改正と道路拡幅後の街並み

日本が近代化を行うにあたって、鉄道敷設、電信・電話線敷設、鉄道馬車やのちに市電の敷設、そして馬車や自動車<sup>15</sup>が往来することを見通した道路拡幅、近代的な都市の外観を整備するために、東京市区改正事業が実施された。この結果、銀座通り北の日本橋通りの街並みは伝統的な工法による建屋と、当時の建築教育で習得されていた様式建築とは異なり奇抜な意匠も含め擬洋館と呼称された、一般の大工・工務店の実現した西洋風の建物が、入り混じる結果をもたらした。当時の建築家の田邊淳吉が「百鬼夜行」と建築雑誌に酷評した街並みである。主要な大通りに沿って整然とした建物が建ち並ぶ西洋の大都市を見聞してきた政治家が貴族院で街並みについて発言するなど、市区改正計画過程で多くの論説があったことは、それだけ街並みに対する関心が高かったことを示している。にもかかわらず、中層の華麗な街並みを実現することはなかった。

エンデ、ベックマンらの中央官庁街計画を実現しようとする外務省派が存在し、西洋風の華麗な地区計画を画策していたが、予算規模の縮小とともに実現への道は遠のき、芳川顕正東京府知事のもとで内務省派の堅実な計画が実行されることになった。府知事の道路・橋梁・河川は本、下水・家屋は末という発言の真意が問い直されているとは

いえ、一般街区および主要街路沿いの街並みを近代的な外観に整える事業など、都市デザイン領域についての研究、実施体制の構築は望むべくもなかった。

中央官庁街の華麗な計画と、一般の個別建設にゆだねられた街並み形成とは別の議論が必要であった。しかし、一般の街並み形成に関して、当時の建築規制のレベルではとても近代的な街並み形成に資する新たな制度的枠組みは出現する体制になかった。建築家は存在しても、街並みとして都市計画の詳細計画に関わる職能は存在せず、単なる予算規模ではなく、質的な調整機能を都市デザイン領域に確保する体制づくりはまったく考慮されなかった。

街並み形成はむしろ、伝統工法に頼る以外に実現の見通しは立たなかったに違いない。何しろ、一般の人々が選考する建物は伝統工法の建物であって、関東大震災以前には防火建築といえども、土蔵造りが圧倒的に多かったことは、日本橋通り沿道の市区改正後の写真を見ても明らかである。

洋風の建物が建ち並ぶことが前提での街並みのルールづくりや調整体制は当時まだ非現実的であったに相違ないし、伝統的な土蔵造などを擬洋風の建物とともに都市デザインの文脈で統御する観念、計画概念でさえもが存在しなかったと考えざるを得ない。

当時の建築家は様式建築をいかに単体の記念建造物に設計していくかを追求することに従事し、街区建設や都市建設を、パリのオースマン男爵のように新興階級のブルジョワジーにとっても魅力ある事業フレームとともに、民間アパートメントの規制・誘導によって実現する概念は希薄であったと想像される。

街並み論議が当時喧しかったにもかかわらず、街並み形成に関して何の制度的な裏付けもなく市区改正の事業が遂行されたことに対し、街並み制御の必要性を認めて、制度につなげることはなかった。

東京の市区改正以降、横浜やその他の大都市で市区改正が進められていくが、江戸時代からの狭い道路の拡幅と伝統的な街並みの再生はできても、近代的な街並みとしてプロトタイプとなり得るような展開はほとんど見られなかった。わずかに、神戸市の海岸通り[写真12]や横浜市の公共施設の集まる地区、名古屋市、福岡市の中心部などに伝統的な町家に近代的なビルの混じった街並みおよび、近代的なビルによって形成されるごく狭い範囲の街並み形成が見られたに過ぎない。何よりも防火措置が必要な

中心部における市区改正でさえ、火防線に指定されれば土蔵など伝統的な木造工法による街並み形成を行い、それ以外の区域では、明治中期以降も不燃材である瓦で屋根を葺いた町家建設が継続したことが、古写真からも読み取れる。

全国一律の防火措置等の統一は、1919年の都市計画法および市街地建築物法によって実現するが、その4年後に関東大震災が発生し、両者相俟って町家に代わる防火構造の木造建築が普及するが、街並み形成の論理を持っていた伝統工法の町家の街並みに代わって、街並み形成につながることはなかった。街並み形成の仕組みを内在していたといつてよい優れた町家の街並みは、関東大震災後に明らかとなったように、土蔵でさえ耐震性能と防火性能で目的に耐えられず、これに中層高層化の街並みへの転換という方向が加わると、街並みを形成できる総合的な新たなプロトタイプの出現は、確かに手に余る大きな障壁に突き当たるに違いない。

#### (6) 近代的街並みの出現

##### 1) 函館小樽に見る大火後鉄筋コンクリート造の街並み

地方都市で先進的に防火措置に取り組んだのは函館市である。伝統的な土蔵造りに代わって、鉄筋コンクリートの街並み造成を行ったのである。函館は度重なる大火に見舞われている。明治11、12年大火後の市区改正で二十間坂以西が整備された後、明治40年の大火でまた被災し現存する建物はそれ以後建設された。大正10年の大火後に火防線として、ブロック造も含めて鉄筋コンクリート構造が2/3を占める耐火建築物から成る銀座街の街並みが形成された<sup>16</sup>。函館市で活躍した中村鎮は、RC造のコストが高くなるのを、補強コンクリートブロック工法で廉価に普

及させる取り組みを行い、銀座街ではRC造に次ぐ棟数のブロック造すべてを担当した。しかし昭和9年にまた大火に遭遇し、火は食い止めたが、開口部の防火性能不足からほとんどが内部を焼かれ、煉瓦造等とともに被災倒壊した。これを調査した建築学会調査団は「鉄筋コンクリートが火に弱いという誤解を解く」パンフレットを配布している<sup>17</sup>。同時期に函館市の中心部十字街でも、木造にモルタル壁の建物とともにRC造の建物が建設された。また学校建築をRC造で建設することも函館で実現し、関東大震災後の学校RC化の先駆となった。

小樽では明治37年の大火後、市区改正で道路が拡幅され、明治末には色内十字街周辺に煉瓦造石貼りの日本銀行など銀行が建設され、その後大正末期から昭和初期に鉄筋コンクリート造の銀行等が建設されて「北のウォール街」と呼称された。これらは現在でもその姿を見ることができる。

大正10年大火後一斉に函館銀座街で、鉄筋コンクリート造を主とする防火構造の街並みが形成されたことは意義深い。しかし関東大震災後の復興計画においては、学校RC化は実施されたものの、街並み形成に関しては助成方式<sup>18</sup>などを含めて、函館の事例を発展させ、RC造の中層の街並み形成を積極的に実施することはついになかった。

##### 2) 市区改正後の東京中心部

東京の市区改正は明治22年に計画決定され、大正初期までかかって実現された。沿道に揃っていた伝統的街並みは、道路拡幅に伴う再築などによって分断された姿に変わっていった。

市区改正事業によって拡幅された京橋以北の日本橋通り、日本橋以北の室町通りと、明治政府の煉瓦街建設によりすでに拡幅の必要のなかった京橋以南の銀座通りで、



【写真10】函館銀座街火防線の街並み f



【写真11】日本橋周辺と京橋方面の中層華麗な街並み g

街並みの変化を確認していく<sup>19</sup>。

### ① 日本橋周辺の華麗な中層の街並み

関東大震災前までに市区改正後の拡幅された日本橋南の沿道東側で、中層の華麗な建物が並ぶ壮観の街並みが出現していた。それ以前は蔵店の連続する街並みであったが、道路拡幅後、明治44年に石造の日本橋が竣工し、その南沿道東側に沿って西川商店(布団店)をはじめとする中層の華麗な建物が並んだ。この時期西側にも中層の不燃建築が並んだ。東側並びで銀座寄り角の白木屋本店は、角に塔屋のある和洋折衷の個性的な3階建て建物が、大正7年同様にドーム状塔屋のある4階建ての建物に建て替えられた。また日本橋周辺の小さい範囲ではあるけれども、村井銀行、国分商店、帝国製麻ビルなど、日本橋川の周辺にベネツィアをイメージした建物群が大正初期までに建設され、大正3年(1914)に三越本店が、日本橋から北に1街区進んだ室町通り西側に、鉄筋コンクリート造6階建ての壮麗な姿を現した。

関東大震災後これらの建物のうち、三越は倒壊せず内部を全焼したが、白木屋は完全に倒壊全焼した。白木屋から日本橋村井銀行までの東側5つの明治末建設の建物のうち、全体の外形が残存したのは3つであった。鉄筋コンクリートが日本で初めて全RC構造物で完成したのが三井物産横浜ビルの明治44年で<sup>20</sup>、それ以前はRCの柱梁と木造床や組積造の混構造などもあり得る。残存した3つの建物の構造は不明で、白木屋や倒壊した中層建物と残存した建物の差も不明である。

明治末期、整然としたオフィス街、一丁倫敦が煉瓦造構造物からなる街区の街並みとして出現した。ジョサイア・コンドル設計の三菱1号館は煉瓦造で2階建ておよび内部に小分けの壁を多く設置した構造が耐震性を発揮したのか関東大震災後による被害後も1968年に取り壊されるまで残存し、2009年には再建された。

しかし一般的には煉瓦造の建物および土蔵造りの建物は耐震的に鉄筋コンクリート造に比べて弱く、関東大震災時の大火災に防火機能を発揮できなかった。

### ② 日本橋以北の室町通り

興味深いことに道路拡幅後も、銀座方面から日本橋を渡った室町通りの東側には、明治10年代の大火後に発令された防火令により建設された蔵造りの2階建ての街並み

が継続している。道路拡幅前後の写真でほとんど同じ蔵店が並んでいることが確認できる。これは市区改正事業時に、それ以前の大火後に建設された蔵造りの街並みの取り壊さないし曳家を両側で行うことを避けて、何らかの理由で拡幅を片側(西側)に寄せたためと考えられる。同様に京橋から日本橋にかけての通りも西側だけを拡幅した可能性は高いが、写真で確認することはできなかった。

### ③ 銀座通り

銀座通りは、すでに道路拡幅を済ませたので、関東大震災まで拡幅に伴う建物移転や建て替えは発生していない。ジョージアンスタイルの銀座煉瓦街の街並み表層に飾りつけや増築によって、当初のヨーロッパ風統一的な街並みから多様な街並みへ変化してきたが、明治30年頃までは、煉瓦街の名残が古写真から見て取れる。しかし明治40年以降震災前までには、銀座煉瓦街の多くが個別に建て替えられて、3階以上の中層の建物も目立つ洋風の街並みが部分的に形成されていた。銀座から京橋にかけての銀座通りは、当初は外部空間だったテラスや1階アーケードが個別に埋められて、すっかり平滑な壁面に浅い庇の屋根を持つ煉瓦街の建物に、3階以上の石造、煉瓦造等が入り混じった街並みとなっており、震災前までに3階以上の中層建造物が一部連続する区間も見られた。しかし日本橋周辺に見られたような揃いの華麗な中層の街並みは見当たらない。

日本橋周辺は、市区改正に伴う沿道建物の一斉の移転や再築の機会が、慣習的なレベルで、中層の街並みを揃って形成する契機となったのではないかと考えられる。

### 3) 地方都市での街並みの近代化

地方の主要都市でも、町家の街並みから近代的中高層の街並みへ向けて、巨大な百貨店など個別の建造物が建設されだした。特に市区改正等の道路拡幅に際して、それまでの町家を継承して、軒切り、曳家移転や再築をして再び町家の連続する街並みが継承されることが大正期までは多かったけれども、昭和期以降は町家以外の建物などによって街並み改変の機会ともなった。

一般的には地方都市で大正期までは伝統工法による自律的な街並み形成が継続し、町家があったところに擬洋館ないし近代ビルが建って揃いの連続を分断されながらも、伝統的な町家の街並みを主として、中高層の洋館やビ



ルが入り混じった街並みとなっていた。そのようななかで、一角とはいえ近代的な街並みを形成した場所が地方都市の一部に出現した。

名古屋市広小路通りでは、銀行の集まる交差点を中心にドーム状の建物を複数含む中高層の高さの揃った街並みが現出した。それ以外は伝統的な町家平入りの街並みであり、僅かな区間に近代的とはいえ、小樽・函館のような近代建築でなく、古典的な様式建築による街並みが見られた。

福岡市などの繁華街でも同様に中高層の本格的な近代ビルの街並みが出現した。そのほかの主要な街並みで近代的なのは、呉市、博多市、神戸市海岸通り[写真12]、などの古写真に見出すことができる。

これらの街並みに鉄筋コンクリート造のものも多くなってくるのは、大正期以降である。

また百貨店は当時新しい商売の空間を一般大衆に供給し、鉄筋コンクリート造高層の巨大な単体の建物が、町家の連続する中に忽然と屹立する風景を各都市において出現させた。他にも本社ビルなどが同様の高層鉄骨または鉄筋コンクリート造のしかも華麗な様式の装飾建築を出現させた。

以上近代的な中高層ビルによる街並みは大正末期まで極めて限定された通りの一部にしか出現しなかった。また、町家や蔵店を主とする街並みに対して、中高層の街並みとの調整方法は、大正末期まで想定すらされなかった。さらに関東大震災後に首都東京に出現したバラック等の仮設建築と、同潤会アパートメントの鉄筋コンクリート中層建築の出現が、その後の街並み形成に少なくない影響を与えていった。しかし新たな景観のプロトタイプを中高層化する都市に対して普及することはできなかった。



[写真12] 1920年代神戸市海岸通りの中層街並み c

#### 4. まとめ

明治期の古写真には秩序ある揃いの街並みが武家地、町地、宿場町と日本中で撮影されていた。伝統的な木造家屋の造作方法で形成される建物には、プロトタイプとして揃いのある街並みを形成する論理が組み込まれているといえた。銀座地区全体での煉瓦街の建設後も人々は、伝統的な木造建物を選択し、大工等の生産側も新たな西洋式の建物生産方向に舵を切ることはなかった。当時規定されていた防火性能に優れた石造、煉瓦造、土蔵造りのうち、土蔵が選択され蔵造りの並ぶ街並みも現れた。伝統工法による街並みは東京でも明治期、大正期、昭和初期まで継続した。最先端の東京中心部でも、市区改正で百鬼夜行の街並みと酷評されたのは、それまでの伝統的な揃いの街並みに対して、日本橋、室町通りでは土蔵造りに中層の擬洋風の建物が高さもまちまちに混じり合った景観のためであった。日本橋周辺に僅かに中層に揃った壮麗な建造物が並んだが、関東大震災で破壊された。火防線に指定された両側に中低層のRC造街並みが函館市銀座街で実現した。しかしこれらが関東大震災後のプロトタイプになることはなかった。

#### [写真文献]

- a. 厚木市HP特集ページ: フェリックス・ペイトと写真  
<http://www2.city.atsugi.kanagawa.jp/broadband/archives/felix/index.html>
- b. 長崎大学附属図書館古写真オンラインデータベース
- c. OLD PHOTOS of JAPAN: 町並み  
[oldphotosjapan.com/ja/%E3%82%AB%E3%83%86%E3%82%B4%E3%83%AA/city-views/](http://oldphotosjapan.com/ja/%E3%82%AB%E3%83%86%E3%82%B4%E3%83%AA/city-views/)
- d. 註9の文献 p67～68をスキャン
- e. 北海道大学附属図書館北方資料室等の所蔵資料  
<http://www.lib.hokudai.ac.jp/cgi-bin/hoppodb/record.cgi?id=0B026230000001000>
- f. <http://tanosimi.bunka.main.jp/?eid=1104203>
- g. 手彩色古写真: 長崎大学附属図書館 Old photo Lib.  
[www.page.sannet.ne.jp/rokano28/edo/tesaisiki/tesaisiki.htm](http://www.page.sannet.ne.jp/rokano28/edo/tesaisiki/tesaisiki.htm)



---

註

1. 芦原義信「街並みの美学」1979年2月:岩波書店p5~14に本稿が要約する内容が記述されている
2. 以下の註3、4とともにこの註2末の文献で丸茂が記述している。2は歴史学者の宮崎市定の説の紹介、3、4は丸茂の見解であり、父性原理の都市か母性原理の都市か2つの道がありバランスのとり方が異なると述べている。丸茂弘幸「第2章 自己実現の環境デザイン」:「都市のデザイン〈きわだつ〉から〈おさまる〉へ」都市美研究会編:学芸出版社 2002年8月
3. 同上
4. 同上
5. 建築家・都市計画思想家であり、代表作に京都国際会議場がある
6. 雑誌「都市住宅」編集長の植田実が建築家大谷幸夫特集号でタイトルとした大谷の思想で、個の建築要素の中に全体に調和する方法論が組み込まれている関係
7. ノーバート・ショウナワー「建築の絵本 世界の住まい6000年」1985年5月:彰国社
8. 切妻屋根ないしはこれに類した屋根の棟(屋根が両側から合わさったトップの部分)が街路方向と平行で、街路から平入町家を見ると軒の線が水平になる
9. 屋根の棟の方向が街路方向と直角に近い角度の町家で街路から見ると三角形の壁等が見えて、ひとつひとつ独立した形に見えるやすい
10. 撮影年は石黒敬章「ビックリ東京変遷案内」2003年3月 平凡社p65 による
11. 藤森照信「明治の東京計画」2004年11月 岩波書店
12. 註10 による
13. 撮影年は石黒敬章「明治の東京写真 丸の内・神田・日本橋」2011年3月 角川学芸出版 による
14. 大火後木造町家のまま復旧した主な重要伝統的建造物群保存地区として、飛騨高山地区(1875)、岐阜県郡上八幡北町地区(大正8年(1919))など、重要伝建地区ではないが街並みで有名な木曽地方の馬籠宿(明治28年(1895)大正4年(1915)大火)等がある
15. 1878パリ博に自動車が出展され、19世紀末にはブジョーやダイヤモンド製エンジン搭載などの4輪車も万国博覧会に出展されている
16. 建築学会の調査報告によると、銀座街両側66軒のうち、RC造24棟、コンクリートブロック造19棟、煉瓦造15棟、他に木骨鉄筋コンクリートと土蔵造りが混在 [www.toumon.arch.waseda.ac.jp/.../kenchiku\\_hokkaido\\_2011....](http://www.toumon.arch.waseda.ac.jp/.../kenchiku_hokkaido_2011...)
17. 佐野利器は、真のコンクリート造は防火機能を果たしたと指摘した。ブロック造、組積造は焼け落ちた建物もあったが最近まで現存していた建物もあった
18. 註16文献によれば、函館銀座街では一般木造建築費80円とコンクリートの160円の差額が補償された。コンクリート造が当時この価格を実現できそうもなかったのを、中村のブロックなら可能と

---

して実現に至った

19. 註13の石黒敬章著作の写真を参照した
20. [www.shin-ken.or.jp/shinken/297.pdf](http://www.shin-ken.or.jp/shinken/297.pdf)

---

[執筆者]

相羽 康郎

Yasuo AIBA

デザイン工学部 教養教育センター

Center for Liberal Arts, School of Design

教授

Professor